

生涯学習「西柴」講演会報告（詳細版）

「南極観測体験記～南極行動のはなし～」

講師：「しらせ」元艦長 帖佐正和氏

2025年11月25日（火）10時半より行われた講演会の報告です。

講師の帖佐正和氏は、海上自衛隊に勤務され、1993年から1998年の間に、「しらせ」副長として2回、艦長として2回、南極へ赴かれました。そのときに撮影された数々の写真を交えて、日本と南極を何度も往復された方ならではの貴重な体験に基づくお話を伺うことができました。

1. 南極大陸の特徴

南極大陸は、周囲から隔絶され、孤立した大陸であること、そして、数百万年にわたって大地に少しずつ降り積もった雪が氷となり、最も高い所では富士山より高い 4000メートルになる。厳しい自然環境だが、ペンギンに代表される動物や苔や藻などの植物も生息している。

2. 南極と人類の関わり

南極大陸に関する情報が初めて日本にもたらされたのは、織田信長の時代で、想像上の大陸として「南方の大陸」が書き込まれた当時の世界地図を通じてであった。

19世紀末からは、国際極観測年が設けられるなど、観測の時代に入り、昭和32年には南極条約によって、領土権の主張凍結・軍事利用の禁止・科学的調査の自由と国際協力が定められ、国際的な調査体制が進められていった。

3. 日本の南極観測

日本の南極観測の嚆矢となったのは、わずか全長 34m・204t の開南丸で明治45年1月に南極大陸に到達した白瀬矗中尉の活動である。その後、昭和7年の「国際極年」での北極観測を経て、昭和32年の「国際地球観測年」には、第1次南極観測隊が派遣され、日本による本格的な南極観測が始まった。このときは、敗戦国日本の参加に反対する国や観測の制限があった。

4. 「しらせ」の南極地域観測行動

<日本の歴代の南極観測船>

日本の南極観測船は、①宗谷(1957年～1962年)、②ふじ(1965年～1982年)、③初代「しらせAGB5002」(1983年～2008年)を経て、現在は④2代目「しらせAGB5003」(2009年～)が活躍している。

<「しらせ」による南極観測支援>—輸送、基地建設支援、観測支援

「しらせ」の大きさ

初代の「宗谷」は全長 83m・2,736t だったのに対し、代替わりごとに大型化し、帖佐氏が副長、艦長を務められた初代「しらせ」(海上自衛隊の分類では「砕氷艦」)は、全長 134m・11,600t で、一番高いところでは 15 階建てのビルに相当する。

南極圏の荒海での観測機材等の輸送の難しさ

この大型観測船には、食糧、貨物の半分の重量を占める燃料のほか、ヘリコプター、精密な観測機材が満載されている。それを乗組員約 170 名が、南極圏の「吠える(南緯)40度、狂う50度、絶叫する60度」と言われる荒海を安全に操船し、故障なく無事に昭和基地に届けている。乗組員の中には、「しらせ」航行中に成人式を迎える若い隊員も含まれる。

富士山より高い「ドームふじ基地」での観測への貢献

帖佐艦長のときには、「ドームふじ基地」の観測を支援する資材や機材の運搬の一端を担い、富士山より高い標高 3810mの氷床にある基地から、百万年近い空気が閉じ込められている氷床の氷を取り出して、環境の変化を調査することができるようになった。

「しらせ」の南極までの航路と昭和基地への機材等の移送と撤収

「しらせ」は毎年 11 月に日本を出港して南下、フィリピン沖では先の大戦の犠牲者の追悼式を行い、赤道を越え、豪州フリーマントル市に寄港する。燃料や新鮮な食糧を積み込み、現在では飛行機で移動してきた観測隊員や交換科学者等約 70 名を乗せて、昭和基地を目指す。

昭和基地近くに接岸後は、積み込んできた千トン以上もの荷物を昭和基地に移送する業務が始まる。ヘリコプターや雪上車で運搬するが、雪上車はかなりの重量があるため、南極といえども、氷が溶ける心配のない夜間の作業となる。移送が完了すると、環境保護の観点から「ごみ」を何百トンも撤収して、交代の越冬隊員とともに昭和基地を離れる。

質疑応答

以上のような興味深いお話のあと、質疑応答が行われた。

- ① 南極では、吐く息は白くならないのか→わからない。吐く息が白くなるのを感じたことはなかった。
- ② 南極では雪は降らないのか→南極大陸の氷床はわずかな雪が降り積もった結果

- ③ 女性が参加する南極観測→帖佐艦長のときに昭和基地に女性専用の宿舎が建てられ、女性の観測隊員、調理隊員、報道記者が越冬するようになり、最近では女性が越冬隊長を務めるようになった。
- ④ 艦長として大変だったことと喜び→一人ぼっちになっている隊員がいないか、常に気を配って見ている。「ドームふじ基地」の観測支援に貢献したことは大きな喜びである。

受講者の多くは、南極と言えば「タロー・ジロー」を思い浮かべる世代で、「宗谷」が流氷に阻まれソ連船に救助された記憶もあるかと思われませんが、現在の「しらせ」は世界有数の砕氷能力を有し、ハイテク日本の南極観測を支えていることがよくわかる講演でした。

追記

2代目「しらせ」による最近の南極地域観測支援活動については、海上自衛隊の公式チャンネルで動画を視聴することができます。

【南極地域観測協力行動】(ダイジェスト版)第66次南極地域観測協力行動「しらせ氷海に行く」

<https://www.youtube.com/watch?v=r4sYOyb3U58>

↑上の青字の部分をクリックすると、動画が表示されます。